

巻頭言

巻頭言

近畿大学医学部循環器内科教授
宮崎 俊一

私は循環器病学が専門であるが、2011年の秋頃から論文捏造に関する話題がインターネット上で出てきた。その内容は関西地方の大学教授が腎臓における angiotensin 系, および心臓における血管新生に関する基礎研究論文でデータを捏造しているというものであった。具体的には画像の使い回しやグラフを反転して貼り付けているといったもので、かなり稚拙な捏造内容である。しかしながら発表されている雑誌は Circ.Res をはじめとして循環器領域ではトップジャーナルといわれる雑誌が多く含まれていた。私はこの基礎領域は専門でないが、おそらく論文の内容としては likely な story であり、画期的とまではいえないがそれなりに新しい結論であったと思われる。つまり、story として興味深く結果が結論を支持しているので reviewer はデータをじっくり見ないままに accept したと思われる。その後、この教授はノバルティス社の angiotensin receptor blocker であるディオバン事件で臨床においても稚拙なデータ捏造による不正論文を執筆し、すったもんだの挙げ句に依願退職(懲戒免職ではなく?)となった。現在、ディオバン事件は検察による捜査の結果、薬事法違反事件として立件される状況となっているが、実は前段階として基礎研究における捏造論文があったので、そもそも怪しいと感じられたのである。もう一つの捏造事件として STAP 細胞問題がある。この問題は上記の捏造事件と似ていると思う。この事件については報道による情報を見ていると著者自身は結論は正しいと思っており、結論が正しいので合致しないデータは変更して良いと考えたふしがある。これは科学の思考過程と全く順序が逆である。本来、データを分析した結果を考えて結論を得るべきなのだ(当たり前である)。この点が“科学者としての基本部分を鍛え直す必要がある”と野依理事長がコメントした所以であろう。



さて、米国における循環器領域の論文捏造事件としてはハーバード大学事件が有名である。これは1980年代の初めにハーバード大学の若き研究者であったジョン・ダルシーがおこなった論文捏造事件であり、その上司であったユージン・ブラウンワルド教授を巻き込んだ大事件であった。この事件でダルシーはほとんど(または全く)実験せずに、データを出していた。そして2

年間に約100編という膨大な数の論文と抄録を発表していた。多くの同僚はこんなにたくさんの研究成果がでるはずがないと思ったはずだがブラウンワルドはそうは思わなかった。このため一度はハーバード大学内部での軽微な処分とされたが、半年後にダルシーは再度捏造事件を引き起こし、当初は彼を擁護した指導者達を裏切った。否、指導者達は一度捏造行為を行ったものは再度同じことを行うということを知らなかったのである。結局、この問題は1981年に米国下院科学技術委員会に設けられた調査小委員会で聴聞がおこなわれ、委員長であったアルバート・ゴア・ジュニア（後の民主党大統領候補）は以下のように結論づけた。“論文捏造事件が後を絶たない原因の一つは、指導的立場にある人々が深刻に受け止めていないからなのです。”

古来、論文捏造事件というのは後を絶たない問題であるが、近年の成果主義、単年度予算、期限付き身分、などのキーワードで括られる科学を取り巻く環境の変化は以前よりも多くの不正を生むことに繋がることを恐れる。科学は社会との関係を持ちすぎたのかも知れない。私は科学者としての基礎部分を厳格に教育した上で、一定の身分を保障して研究を継続させる環境が長期的には優れた研究結果を生むと思うが、これは日本独自の終身雇用制と類似しているのは偶然だろうか。今こそ日本の科学研究発展について真剣な議論が始まるべき時期ではないだろうか。